弘法さんかわら版

発行編集部
大塚耕平事務所
☎052-757-1955
Kouhei@oh-Kouhei.org

皆さん、こんにちは。最澄・空海に至る**飛鳥・奈良時代の仏教**がテーマの今年のかわら版。今月は**聖徳太子一族の滅亡**についてお伝えします。

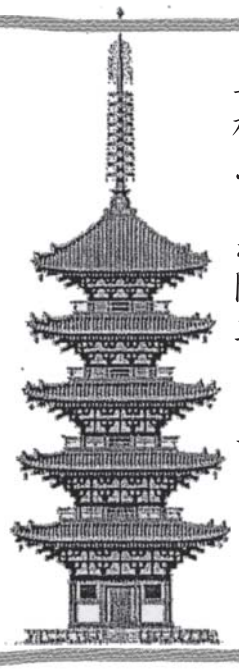
★蘇我氏の専横

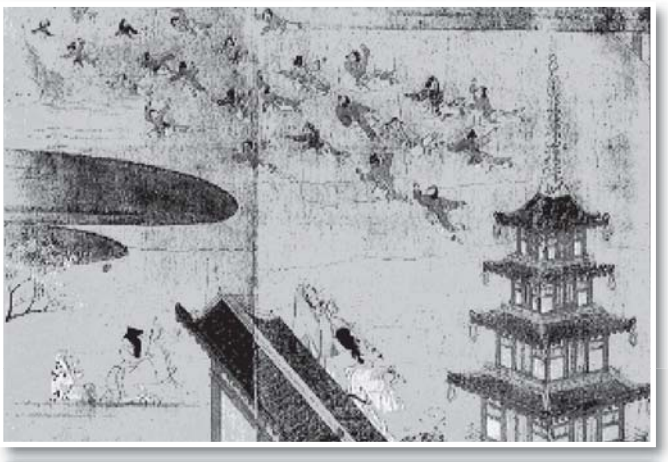
六三九年に百済大寺を創建した**舒明天皇**が**六四一年**に崩御。再び**山背大兄王**（聖徳太子の息子）が皇位継承候補となりました。

すると、**蘇我蝦夷（えみし）**はすかさず皇后の**宝皇女（たからひめみこ）**を**皇極天皇**として即位させました（**六四二年**）。

いずれ、蘇我氏の傀儡として**古人大兄王（ふるひとのおおえのおう）**に皇位を継がせる伏線です。

また、大勢の民を動員して蘇我氏の墳墓を造営させ、天皇陵と同じように「**みささぎ**」と呼ばせるなど、蘇我氏の専横ぶりが際立ちます。





山背大兄王とその一族 殉教 斑鳩の宮（法隆寺）

その実権が蝦夷の息子**入鹿（いるか）**に移るにつれ、蘇我氏の専横ぶりに批判が集まるようになります。

★聖徳太子一族の滅亡

蝦夷が病床につくと入鹿は一段と先鋭化。根強い皇位継承期待がある山背大兄王の暗殺を画策します。

六四三年、**巨勢徳太（こせのとこだ）**に山背大兄王の暗殺を指示。山背大兄王の**斑鳩宮**は焼き討ちに遭い炎上。何とか難を逃れた山背大兄王でしたが、自分の存在が皇位継承争いと無益な戦いにつながることを憂い、**斑鳩寺**（現在の**法隆寺**）の五重塔で、妻子と一族とともに捨身して果てたと言われています。

ここに、聖徳太子の一族は滅亡しました。「**世間虚仮（せけんこけ）唯仏是真（ゆいぶつぜしん）**」という太子の遺言が偲ばれます。

★倭人僧と遣唐使

六二一年の聖徳太子没後、倭国の内政は太子一族と蘇我氏の対立構図が続いていましたが、六四三年の太子一族滅亡で節目を迎えました。

しかし、倭国が内紛に明け暮れる間、唐や朝鮮三国を巡る国際情勢は大きく動いていました。

六一八年、**隋**が滅びて**唐**が成立。**百済・新羅・高句麗**の朝鮮三国は唐の冊封を受け、臣下となります。

六二三年、かつて遣隋使船に乗って留学した倭人僧**恵日（えにち）**が新羅経由で唐から帰国。

恵日は**推古天皇**に対し、倭人僧の唐からの召喚と唐との国交開始を進言。当時の国際情勢を踏まえた的確な進言でした。

舒明天皇の代になった**六三〇年**、**第一回遣唐使**が派遣されます。

しかし、唐からの冊封は受けませんでした。かつて太子が隋に対して「朝貢すれども冊封されず」とした外交姿勢を継承したと言えます。

隋と同様に、唐も朝鮮三国を制するために、その背後に位置する倭国との関係に配慮したようです。

★朝鮮三国の争乱

六四一年、百済で政変が発生。即位した**義慈王**は**六四二年**に新羅へ侵攻。新羅は**金春秋**を高句麗に派遣して援軍を要請。高句麗は領土割譲を新羅に要求したために両国は対立。人質になった金春秋は脱走して帰国。

同年、高句麗でも**泉蓋蘇文**が国王や大臣百人余を惨殺。百済と結んで新羅に侵攻。臣下である朝鮮三国の争乱に激怒した唐の**太宗**は、**六四五年**、高句麗征討に出発。**隋麗戦争**の再現です。

同年五月、太宗は国境線の遼河（りょうが）の橋を壊して退路を断ち、兵士たちに不退転の決意を示して高句麗に攻め込みます。

★乙巳の変と大化の改新

国際情勢が緊迫する中、翌**六月**、倭国では**乙巳（いつし）の変**が起き、**大化の改新**に至ります。来月は、その背景と経緯をお伝えします。乞ご期待。